

支部の活動概要

《8・9月の活動実績》

- 9.13(水) 市民講座(「歴史認識関連」、コミセン)
- 9.16(土) 現地研修支援(講義、遺構維持推進会、三芳)
- 9.30(土) 支部9月役員会(コミセン)
- 9.30/10.1 館山航空基地開隊64周年記念行事(中止)

《10・11月の活動予定》

- 10. 8(日) 千葉県護国神社秋季例大祭清掃奉仕(千葉市)
- 10.10(火) 旧海軍予備学生戦没者慰霊祭(安房神社)
- 11月中旬 館山航空基地殉職隊員追悼式(館山基地)
- 11.25(土) 支部11月役員会(コミセン)

21空群が災害派遣訓練を実施

9/26・27 北条小学校校庭

すでに地元紙等で報道されたように海上自衛隊第21航空群による大規模災害発生時の救出・救助等を想定した災害派遣訓練が、館山市の協力のもと2日間にわたって行われております。訓練は、県知事から災害時の「ヘリコプター場外離着場」に指定された北条小学校校庭において、21空群の哨戒ヘリ、救難ヘリに加えて陸上自衛隊と海上保安庁のヘリコプターによる離着陸訓練を主として、災害陸上派遣隊(RRU、21空群隊員)による負傷者搬送や救助作業用機材の展開・天幕設営作業等が実演されております。

訓練場の北条小校庭では、館山市危機管理室長の渡邊浩一郎危機管理監の陣頭指揮のもと市職員や安房消防署職員が緊急時に備え連絡・警戒等の配置に就き、2日間の訓練の地上支援に尽力する姿が見られました。<見学しての所見>

- ※災害時に即応するため、平素から”たゆみのない”訓練を続けている部隊・隊員の努力が実感として伝わってきました。またマスコミ報道とともに、市民一般に訓練を理解してもらう上で意義ある企画だったと思います。
- ※(一方で)傍らで見物していた一市民(男性)から、「わざわざ授業中の小学校校庭でやらなくても、もっと広い安全な空き地で・・」といった批判的な声が聞かれましたが、「(このような環境条件下で行う)訓練の意義」についての認識不足からくるものでしょう。これについてはマスコミ報道に期待するところ大ですが、市民と接する機会が多い我々OB(市民の一員ですが)としても、平素から(市民の理解が得られるよう)意識しておくことが大切だと考えます。(男性にはその場で手短かに説得?しておきました) <川村 記>

市民講座「続・歴史認識」

9.13(水) 館山市中央公民館

昨年に引き続き「続・歴史認識」と題して、今回は日中近代史の中で、上海・満州事変から日中戦争・日米開戦に至るまでの日中関係について、状況の悪化と日中戦争の泥沼化・長期化の原因並びにその間の米国の関与と日中戦争との相関に焦点を絞り、「封印された歴史」を掘り起こしてみることにしました。

<判明した史実>

- 満州事変・満州国の建国を機に米国が「日本の孤立化政策」を打ち出し、盧溝橋事件以降、急速に中国に対する「兵器・弾薬類の軍事支援(戦闘機、車両、弾薬、さらには爆撃機・・)」を増強した(終戦まで)。なぜ米国がここまで軍事支援をしなければならなかったのか。日中戦争は「米国による代理戦争にほかならない」と明言する歴史家もいる。
- 日米開戦の年の4月から開戦直前までの8箇月間に、50回にわたって行われた「日米交渉」がなぜ双方とも解決点を見出せず交渉決裂・開戦に至ったのか。米国の真意・意図はどこにあったのだろうか？

以上の二つの史実は、日中戦争及び日米開戦(太平洋戦争)の発端、原因を究明する上で興味深くかつ価値ある事象だと思っております。今後とも「封印された歴史」の真相解明に向けて、(我々の子孫のためにも)微力ながらも努力を傾注する所存です。 <川村 記>

千葉県との防災協定締結に関するお願い

申出先: 館山支部事務局 TEL22-0230

「支部だより7月号」で概略紹介済ですが、千葉県庁危機管理課と調整を進めている千葉県隊友会本部が、このボランティア活動の趣旨等について改めてアピールするとともに、会員諸兄の協力をお願いするために全員にリーフレット「千葉県への災害対処協力をお願い」を配付しました。まだ県備蓄倉庫の管理について、勤務態様等 具体的に煮詰まっていない点がありますが、凡その協力者数を把握しておく必要上、(登録は後の問題として)、このボランティア活動に関心のある方は、支部長あて積極的に申し出てください。 <支部長>

新入会員紹介

8月期 新井 務 会員(海、館空基)

海自での勤務を全うされ、館山支部への即日入会を歓迎致します。

“ドローン”のルーツを辿ると・・・果てしない「学術研究と軍事研究」論争

先日、NHK特集で放映された「北アルプス・ドローン縦走記」では、人間(写真家の眼)や航空機では観察・撮影できなかったアルプスの未知の美術的な側面が、ドローンを飛ばすことによって明らかにされ、考古学の分野でも遺構の学術調査や未知の遺構(ジャングルの中など)の発見が、短期日で効率的にできることが確認されている。

また、広域的な河川氾濫、津波災害や火山噴火の被害状況等、危険を伴う調査・情報収集が短時間でできるなど、彗星のように現れたドローンの活用、応用分野が今後、際限なく極めて速いペースで広まっていくことであろう。

ドローンのルーツは結局は「最新鋭の対潜兵器」

海上自衛隊が昭和42年頃、米海軍から導入した「DASH(ドローン・アンチサブマリンヘリコプター)」は、無線誘導式の無人ヘリであった。DASHの頭文字「ドローン」は、「遠隔操作で飛行させる無人航空機」のことで、当初、米海軍が偵察機として開発を進めていたものを対潜兵器として応用・完成させたもので、軍事研究の産物「兵器」にほかならない。

このような事例はほかにまだ沢山ある。現在では車の必需品となっている「カーナビ」の心臓部は、(当初)米国防総省の管理下に置かれていた人工衛星を利用した「GPS(全地球測位システム)」なのである。航空機や船舶の安全航行システム(レーダー、GPSほか)や漁船の魚群探知機(ソナー)、また土木建設に欠かすことのできない無限軌道(戦車のキャタピラ)のブルドーザー等々、そのルーツを辿るといずれも軍用技術に行き着くのである。

「学術研究と軍事研究の分離」が(神経質に)叫ばれているが、広義・狭義を問わず、学術研究と軍事研究の定義付け自体、難しいと言うよりは不可能だと思う。自分に都合の良い解釈、独善的な主張がまかり通っているような気がするのである。

古今東西、軍用兵器は国の科学技術の粋を結集した「最先端技術の結晶」と言ってもよい。なぜ? (乞う自問自答) 「軍事研究と学術研究」が論争の題材になる国は、おそらく世界中で日本以外にないのではなかろうか。

「戦時の館山海軍航空隊」・・・空白の歴史を探る

昭和5年に横須賀鎮守府所属の内戦航空隊として開隊した館山海軍航空隊(「館空」)は、華々しい作戦場面や公刊戦史に登場することもなく、加えて終戦とともに文書のほとんどが焼却され、防衛研究所にも日中戦争以降終戦までに館空が発簡した文書や戦時記録・写真は皆無であり、信ぴょう性のある軍関係者の証言もない。完ぺきとも言える終戦処理(焼却)であった。必然的に目撃者等の証言がもともなかった”怪しげな話”が「館空の歴史」として語り継がれることが多い。

他の部隊の戦時記録等から館空に関する断片的な記述を見付け出し、戦時における館空の動静を概略まとめてみた。

☆八丈島前進基地の後方支援を支え続けた館空派遣隊

日米開戦とともに作戦部隊の前進・中継基地として重要度の増した八丈島に、館空から多数の基地要員(整備員ほか)が派遣された。その規模も実態も分からないが、関東航空隊(19.8木更津で編成、作戦機の後方支援を任務とする飛行隊を持たない乙航空隊)の八丈進出時(19年末)の記録に、「館空八丈島派遣隊と交代」の記述があることから、開戦前半から19年末までの3年間にわたって、館空派遣隊が八丈島で作戦部隊の後方支援を担い続けていたことが分かる。

☆館山基地に駐留した外戦航空隊

戦争後半、館山基地には外戦航空隊が入れ替わり駐留し、錬成訓練後、南方戦線に出撃して行った。中には全滅した航空隊もあった。開戦翌年に館山で編成された252空は、基地航空隊としてラバウルを拠点に2年近い航空消耗戦を戦い、19年初め全滅に状態で館山基地に帰投し、再編成後、再び硫黄島・比島方面の作戦に従事し、一部の飛行隊は終戦まで館山基地の防空に任じ、孤軍奮闘している。19.11のサイパン銃撃隊は、252空館山派遣隊から出撃したものである。

☆対潜護衛航空部隊の誕生と館空の任務の変遷

S18. 12、海上護衛総隊の新編により対潜護衛航空隊901空が編制され、館空はその指揮下で対潜護衛任務に従事し、さらにS19. 12、903空の新編により館空は解隊され、水上機隊は903空に、艦上攻撃機隊は901空に編入されることになり艦上攻撃機隊は全機、海南島(中国)に派遣されたまま、その消息は(記録上)不明である。

☆他部隊の記録に残る館山基地での戦闘場面

S20年2月上旬、館山基地は2日間にわたって米機動部隊艦載機、22波、延べ122機の反復攻撃に晒された。折しも房総沖に出没した米潜の搜索撃滅作戦参加のため、館山基地には901空、903空、横空等の作戦機が集結中であり、252空による迎撃戦闘や地上対空砲戦が加わり、館山基地はさながら戦場と化した。当時、館山に司令部を置いていた903空の戦闘詳細にはその時の状況が克明に記録されている。

なぜ館山基地関係の戦没者慰霊碑が建てられなかったのだろうか？

館山には館砲校、洲ノ空の慰霊碑のほか安房神社には二つの海軍関係の慰霊碑が建立され、慰霊が行われてきた。戦後、館山航空基地はそのまま海上自衛隊の航空部隊として再興され今日に至っているが、なぜか本家本元の館空の戦没者を顕彰するものは見られない。館空の戦死者に限らず、館山基地で養成され太平洋戦争の緒戦から主要な作戦において戦死した空母搭乗員や開戦翌年に館山基地で編成され南方方面に進出した252空(前述)など、館山基地と密接に関係した航空隊の戦死者はおびただしい数に上ると考えられる。

疑問の答えは不明であるが、S19年末の館空解隊に始まり、終戦前の再編成、そして終戦・復員と言った目まぐるしい変動もあり、館山基地に精通し、発起人になるような人達ががこの地区には残らなかったであろう。

<自称地域史探索マニア その16>